

赤尾君子さん（森山君子 英19院）の第一歌集「阿修羅の気配」をご紹介します。森山さんに素晴らしい紹介文を書いていたきました。

私は何者か？略歴以外にそれを表明する多様な手段があります。西欧では今から百年ほど前にモダニズムという主観的な感情の流れのままに私は何者か？を披露する新しい自己表現スタイルの模索が始まりました。個人の自由な感情表現によって私の存在のありようを伝えるこの手法は、生活の折々の感情を三十一文字で詩的に表現する日本の伝統的な短歌の手法に似ているようにも思われます。万葉集に遡るこの三十一文字の形式で私たちは自分は何者かを簡潔に詩的に表現することができます。言わば短歌は感情の赴くままに自分は何者かを伝えるまさにモダンな文学手法と言えるのではないのでしょうか。

文学研究の過程でふとこのことに気づいた私は、十五年ほど前から短歌を詠み始めました。今回、母への想いなどその頃の歌を八十首ほどまとめました。編集者の方に「阿修羅の気配」というタイトルを提案していただき、薄緑の霞に阿修羅と母の気配が漂う幻想的で爽やかな装丁に仕上がりました。皆さまの共感を誘うほどのものではありませんが、私は誰？という人生の永遠のテーマを模索する一手段として短歌の手法に目を向けていただければ幸いです。短歌という私たち特有の自己表現の世界で、翼を拡げ時には視線を変えて遊んでみてはいかがでしょうか。

蒼さうと風わたり来る梅檀の木陰は遠き土の香ふむ



赤尾 君子 著  
銀の鈴社

森山さんより、2018年の定例交流会の参加者全員にこの歌集を贈呈いただきました。身の回りの出来事を題材にして和歌に詠んでみるのは素敵だと思いました。歌集をいただいた皆さんとも「心打たれるものがありました。」と歌集への想いを語り合いました。世代や卒業学科を超えた同窓生の集い「はぎの会」ならではの貴重な経験ができたことを嬉しく思います。森山さんにはこの場を借りて御礼申し上げます。

Y. I. (数32)